

Q1 印象に残っている言葉は？

A1

今いる場所で
最大限の
努力をする

学生の時から心掛けてのことです。大学院生時代は留学生の多い研究室に所属していました。当時の指導教官の方針で、打ち合わせや論文の執筆は全て英語でした。留学生との交流は大変なことも多かったのですが、おかげで成長できました。2年間スイスで研究に携われたのも、現在所属している東京大学に呼んでもらえたのも、院生の時の経験が糧になりました。

特に将来を考えていたわけではないのですが、その場その場で努力を重ねていったことが、今につながりました。将来を見据え、向上することも大切ですが、今いる場所で最大限に努力することで道が開けると考えています。

Q2 SATREPSで取り組んでいることは？

A2 ミャンマーにおけるインフラの維持管理システムの構築

父も橋を研究していたので、土木はとて身近でした。小さい頃はあまり興味が湧きませんでしたが、大学入学時に自然と土木工学の道に進み、卒業論文の研究で鉄筋コンクリートと出会いました。

今は、これまでに培った鉄筋コンクリートの知見や技術を生かして、ミャンマーの研究者たちと共に、ミャンマーの道路や橋の維持管理に取り組んでいます。橋脚にセンサーや傾斜計を取り付けることで、状態を常時把握できるシステムの構築を進め



さきがける 科学人

vol.94

コンクリート研究で 日本と世界をつなぐ 架け橋に

東京大学 生産技術研究所
准教授

長井 宏平
Nagai Kohei

Profile

新潟県出身。2005年 北海道大学大学院工学研究科博士課程修了。博士(工学)。スイス連邦工科大学チューリッヒ校日本学術振興会海外特別研究員、東京大学大学院工学系研究科特任講師を経て、11年より現職。



ています。簡素な方法ですが、低コストで実装することが可能です。現状では日本とミャンマーの技術力に差があるので、日本の最先端技術をミャンマーでも使える技術にして普及させることも大切だと考えています。

2018年4月に現地で橋が崩落する事故がありました。ミャンマー建設省からの依頼を受け、日本企業と協力して類似の橋を調査し、維持管理に関わる改善策を提案しました。

日本国内でも地方は開発途上国と似たような問題を抱えていて、土木インフラの老朽化が深刻です。日本の技術を海外に展開すると同時に、海外の事例に学び日本で活用することも求められています。

い研究者と共同で研究しています。基礎的な研究をしっかりすることで、構造物がどうやって傷むのかをきちんと理解でき、適切な対応が可能になります。日本をはじめ世界各国で、構造物の老朽化や災害への対策は喫緊の課題です。日夜研究に励み、今まで以上に社会へ貢献していきたいです。

妻と2人の子供も一緒に住んでいます。デービスは内陸部ののどかな町で、広い公園もあり遊具も充実しているので、よく子供たちを連れて遊びにいらしています。大人になった時は覚えていないかもしれませんが、海外で暮らした経験を将来生かしてくれたらと願っています。

Q3 現在の研究生活は？

A3 米国で育児を楽しみつつ 基礎研究に励む

昨年約1年間カリフォルニア大学デービス校で、客員研究員として分野の近



リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

270

古紙パルプ配合率70%再生紙を使用

JSTnews

February 2020

発行日/令和2年2月7日

編集発行/国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 総務部広報課

〒102-8666 東京都千代田区四番町5-3サイエンスプラザ

電話/03-5214-8404 FAX/03-5214-8432

E-mail/jstnews@jst.go.jp JSTnews/https://www.jst.go.jp/pr/jst-news/



最新号・バックナンバー